眠れる世界

あからーく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
眠れる世界

【Ｎコード】
Ｎ１５８４Ｙ

【作者名】
あからーく

【あらすじ】
目覚めるとそこは見知らぬ世界。
三十路を越えた主人公の行先は不明です。
完全に見切り発車ですが完結させるように頑張ります。
処女作な事もあり稚拙で乱文ではありますが生暖かい目で見て頂けると幸いです。

ぷろろーぐ的なこと

目が覚めるとベッドの上で銀髪の女性を抱き締めていた。
極至近距離で視線が絡み合う。
彼女はうっすらと頬を染めつつもなんとも冷たい表情を自分に向けている。
落ち着け、落ち着くんだ俺。今すべきは香ってくる良い匂いを満喫する事じゃない状況確認が最優先事項だ。
まず身なりは若干乱れてはいるが仕事疲れと深酒からそのままベッドに倒れこんだ時同様Ｙシャツスーツ姿のようだ。
次に銀髪の女性だ。密着している事もありおそらくネグリジェのような薄い肌着を着ているのは解るが……
やはりそういう事なんだろうか。
とりあえず昨晩の行動を思い返してみる。

俺こと一瀬優【いちのせゆう】はミニコミ系の小さな新聞社に勤める３１歳。
家族は大学時代に事故で両親と死別し親戚関係も殆ど無かった事からそのまま実家で独り暮らしを続けている。
彼女も３年前に別れて以来女っ気も無し。
友人や職場での評価は上々。見た目も我ながら悪くないしトークスキルと社交性は自分の武器であり女性と年輩受けも非常に良い。
只実際の所はコミュ障だと言っていい。
友達なら大量にいるがその実メールや電話もろくにしないし、ある種の壁を常に挟んで付き合っている。
無論飲みや遊びに誘われれば参加もするし盛り上げる。
だけど決して懐までは近づけさせないし、その事実を気付かせない。
気の合う友人がいなかったわけでもなく、それならば何故？と言われても自分でも理由が分からない。

で話しは戻るが昨晩の行動だ。
夕方に遠方で取材が入りそれのインタビュー記事を出先でまとめてノートＰＣで本社に送信し、そのまま直帰で帰宅したはず。
明日は休日だったので帰り道にコンビニでビールをまとめ買いし、たらふく飲んでベッドにダイブが一連の流れだと思う。

ならば何故この美味しい状況なんだ。
無意識にイケナイお店に宅配サービスを電話したのだろうか。
それとも夢か妄想なのか……
考えてもらちが明かないので目の前の女性を更にぎゅっと抱き締める事にした。
深い意味はない。
頬を僅かに染めた知的そうな顔立ちが好みだったし折角なので的な意味合いだと思って頂きたい。
その女性は頬を更に染めつつ大きく目を見開いて完全に硬直しているようだ。
とりあえず安心させるように綺麗な銀髪を撫でてみる。
すると真っ赤に染まった顔を俯かせ両手で俺の胸を押し返そうとしてくる。
だけど俺は逃がすまいと片手は絶対離さない。
うん。ほんとになんだこの状況。
すると耳が妙に尖っている事に気付いた。
これが流行りのプチ整形ってやつかと思い優しく触れてみることにした。
すげー自然なんだなぁ……医学の進歩に驚きを覚えつつもムニムニしていると腕の中の女性が目に見えてビクビクッとしている。
そうやって撫でつつもどうしたもんかなぁと思っていると初めて第三者の存在に気付いた。

「〜〜Й！〜〜〜〜〜〜〜Йｃ！」

ベッドの影に俺の手中から銀髪さんをひっぺがそうとしているやはり銀髪の小柄な女の子がいた。
その半泣きの女の子と視線があったので、不安にさせまいとして最上の笑顔を向けてみた。

「Ｙｎｒщёｌｘцё！Ｙｄｘцч！！」

非常にお怒りなようで俺の頭の方に回り込んでポカポカと擬音通りに叩いてくる。
当然ながら全く痛くないがそれよりも今の台詞だ。
今まで一度も聞いた覚えのない外国語とおぼしきもの。
そして段々と冷静になり俺は初めて周りの景色に違和感を覚えた。

『夢や妄想にしてはリアル過ぎるなコレ』

俺の部屋にあった家具や鞄は確かにここにある。
だけど壁が木だ。出入口らしき空間からは朝陽が射し込んできているがそもそもドアが無い。
外からは先の外国語らしき声も聞こえてきた。

「参ったね……」

呟いていると俺に囚われた銀髪さんが顔をあげて自分を見ている事に気付いた。

ファンタジーへようこそ

結論から言うと俺は後ろ手に縛られ、線の細いお兄さんやらお姉さん達に部屋の中央で囲まれている。
俗に言う詰んだ状況だろう。

少し時間は巻き戻る。
ベッドで銀髪さんが俺を見上げ口を開きかけた時に新たに訪問者があったのだ。
そこにはやはり銀のティアラっぽい物を身に付けた銀髪の長身の女性がこちらを見て棒立ちしていた。
同族の女性を抱き締め更には小柄な子に叩かれている俺。
どうみても不審人物です。本当にありがとうございました。
俺の知識でいうレイピアのような細身の剣を抜き放ち駆け寄ってくる様は絵に書いたように綺麗だった。
見惚れていたのは一瞬。
あっさりと組しかれ俺の手中にあった銀髪さんは解放され今度は俺がティアラさんの膝したに囚われる番でした。

見ようによってはこれも先の状態同様美味しい場面なのだろう。
だけど殺気と困惑を併せ持った女性に組しかれて美味しいと思える域に俺は達していないのが残念だ。
そうこうしている内に騒動を知った人々らが続々と部屋に集まってきた。
一様に表情を占めるのは困惑だ。
俺からしてもそう思う。
周りにそぐわない家具やら家電がそこかしこにありスーツを着た見知らぬ男。挙げ句にその男はベッドの上で組しかれ少女は解放された銀髪さんにしがみついて大泣き中。

「ОмЧшмеюц? нпёдч!」

ティアラさんは厳しい表情で俺に問いかけてきているけど如何せん答えようがない。
とりあえず気を落ち着けて日本語で返答してはみる。

「私は日本人の一瀬優です」

当然ながら伝わらない。拙い英語や大学で必修だった仏語を思い出しながら喋ってみても誰にも伝わっている様子は無し。
この場にいる全員とんがり耳に弓やら帯刀している者がいる時点で何となく悟った。

『こんにちは新世界』

というわけでその後後ろ手に縛られ今に至る。
現状が認識出来ても言語の壁は厚い。もっとも説明しようもないが。
周りの方々は恐らくエルフ的な人達だ。
ＭＭＯやファンタジー小説で見る姿そのままだし。
一般にエルフは他種族に排他的で云々てのは良くある設定だけどここでも同じなのかと不安にはなるが、それよりも好奇心が押さえきれない。
ファンタジーな世界は元より大好物なのだ。
テーブルトークは勿論小説からゲームまで幅広く網羅している。
何度空想したかも分からない世界に自分がいる。
それだけで何とも言えない気分だ。

ぼんやりと考えを巡らしていると周囲の輪を割ってエルフの壮年男性が現れた。

目の前まで来ると掌中にあったイヤリングを俺の左耳に何か呟きながら着けると同時に俺はあっさりと気絶していた。

異文化こみゅにけーしょん1

額にひやりとした感覚を覚え目を開けると横にティアラさんが難しい顔で椅子に座っていた。
どうやら俺は自分のベッドに寝かされていたようだ。
改めて自分の現状を考えようとすると不思議と熱っぽく頭の奥がじんじんと痛む。
軽く頭を振りながら身体を起こそうとしたら手元に冷えたタオルが落ちた。
きっとティアラさんが付き添っていてくれたんだろう。

「どうもありがとうございます」

伝わらないと解っていても素直に言葉が滑り落ちた。

「どういたしまして。体調は大丈夫？」

どうやら幻聴のようだ。
日本語だ、それも流暢な。
若干表情に険しさは残るものの心配げな声。
その時耳に違和感を覚え思い出した。

「もしかしてこれのおかげですか？」

左耳に付いているイヤリングのような物に触れながら聞いてみる。

「ええ、それは他言語理解の呪文が込められた物なの。まさか着けた途端卒倒すると思わなかったけど……色々とごめんなさいね」

「いやこちらこそ本当に申し訳ない。どう見ても自分が不審者でしたし、斬られていたとしてもおかしくなかったと思います。いらっしゃればその……先程ベッドにいたお嬢さんにも謝らせてください」

「だそうよ、シェイディー」

入り口に興味深げにこちらを覗きこんでいる二人組がいた。
シェイディーと呼ばれた子はベッドで抱き締めていた娘だろう。
生真面目そうで知的な顔を変わらず赤く染めつつも一定の距離を開けて近づいて来る気配はない。
そして隣にいるのはあのチビッ子だ。
こちらはまた殴りかからんばかりの憤怒の表情。思ってはいけないだろうがぷるぷると怒りに震える姿はとても愛らしくみえた。
何はともあれ確実に悪いのは俺だ。
頭痛を押さえ付けながらゆっくりと立ち上がり、ティアラさんを間に挟んだ距離を保ち深く頭を垂れる。

「シェイディーさん本当にすまなかった。寝惚けていたとしても何も言い訳は出来ない。都合が良いかもしれないが許してほしい」

「ディー！こんな奴許しちゃダメだよ！あれだけひっぱたいても離さなかったしサワサワもずっと止まらなかったもんっ！それにすっごくやらしー顔してたんだよ？！」

ＨＡＨＡＨＡ……このチビッ子やってくれる。
好感度ゲージな物があるならばどのような謝罪をもってしても確実に俺のゲージは０を通り越してマイナス方面に振りきれているだろう。

「駄目よフェリ、きちんと謝罪をしてくれているのだからそういう事は言わないの」

フェリと呼ばれたチビッ子をそうたしなめると俺の方に改めて向き直り赤みの残る顔で笑いかけてくれた。

「丁寧にありがとうございます。その…気にしていないですしそんなにかしこまらないでください」

「体調も大丈夫そうだしディアス様を呼んでくるとしよう。二人との話は後にしてもらうとして暫く待っていてくれ」

と唐突にティアラさん、謝罪もそこそこに二人を連れて出て行ってしまった。

ひっきりなしの頭痛に顔をしかめながら椅子に座りそういやディーさんに名前を言いそびれたなぁと思っていると、いくらか慌ただしげな足音と共にティアラさんと壮年男性を含めた三人が部屋に訪れた。

俺は立ち上がり改めて深く礼をしつつ挨拶をした。

「私は日本人の一瀬優です。この度は騒動を起こしてしまい申し訳ありませんでした」

他に言い様が無い事もあり言葉少なに態度で示す他はない。

「いや頭をあげてください、失礼が多々あったのは我々もですしこちらこそ謝罪をする必要がある」

渋いバリトン声で壮年のエルフは厳かに言う。

異文化こみゅにけーしょん2

「私はこのシナータの森を治めるシルディアス、改めて君への謝罪と訪れを歓迎しよう」

「私はメアシリア、いきなり手荒い扱いをしてしまってごめんなさいね。我々の森へようこそ」

「私はエメスティア、あなたの訪れを歓迎します」

三人共に頭を下げる。

「ご丁寧にありがとうございます。でも何故急に客人として迎えてくれるんですか？先程まで倒れていた時もメアシリアさんが付き添っていてくれたようですが……」

ちらりとティアラさん改めメアシリアさんに視線を向けてから聞いてみる。

「あぁ、エメスティアに啓示が以前にあってね。そう遠くない未来に未知なる場所より縁を求め来訪者があると。只君の現れ方がこのようなものだとは予想がつかなかったが」

苦笑しつつ仰るシルディアスさん。

ですよねー。

ベッド持参でいきなり娘さんに襲いかかっているのは想定外だろう。

しかし啓示なんてものまであるのか。

確かにエメスティアさんが着ている服は他のエルフ達は割に活動的な服装だったのに対して、白地で丈が長いローブに紋様みたいなも

のがポイントで書かれておりいかにもそれっぽい雰囲気だ。

「来訪者の事は皆知ってはいたのだけど私も咄嗟に結び付かなくて」

遠巻きにメアシリアさんに責められている気がしないでもないがスルーして気になる事を一つ聞いてみる。

「先程より頭痛が続いているのですがこれはイヤリングの影響なのでしょうか？単に体調不良かとも思うんですが……」

「魔力酔いではないかと思います。少しお手を失礼しますね」

どこかぼんやりと視線でエメスティアさんが手を重ねてくる。短く何か唱えたかとおもうと白い陶器のような手が淡く光った。

「あなたの身体からは私達が持ちうる魔力が感じません。初めて魔力を体験したため暫くは頭痛が続くとは思いますが長くみても二、三日で治るはずです」

「なるほど……ありがとうございます」

両手を重ねたままに首を僅かに傾げエメスティアさんが言葉を続ける。

「曖昧な言い方になってしまうのですが…あなたの深層に何かカードのような物で包まれたものがあります。私にはそれが何か解りませんが魔力となにか似た大きな波動を感じます。あなたがいた場所に関係してこちらで発現した物なのかそれとも元々持っていたものなのか判断つきかねます。ただそれは魔力と同質のものならばあ

なた自身や周囲にとっても力にも脅威にもなりえるものです。今は丁度トカシアの月にはいりましたしそれによって変化もあるかもしれません」

「はぁ。そのトカシアの月と言うのはなんでしょうか？」

今の俺は間の抜けた顔をしている事は間違いない。
とりあえず何かしらスキルのようなものが眠っているとでも思っていれば良いのだろうか。
しかしエメスティアさんの手はスベスベ感が素晴らしい。
指の先でずっとふにふにしてしまっていたが気付かれていないか不安だ。
メアシリアさんとシルディアスさんのいる方角からそれぞれ鋭い視線と生暖かい視線を感じるがたぶん気のせいだろう。

「簡単に言えば魔力の力が最も強くなる時期です。他にも影響はあるのですが……長くなりますし文字等覚えるべき事は多くあると思いますので今後順をおって説明していきますね」

「すみません本当に色々と。その言い回しだとやはり私はもう自分の世界に帰れないって事ですかね？」

返事を待つ間に今更ながらまるっきりその事が頭から抜け落ちていた事実に驚いた。
正直に言えば未練が無いって訳じゃない。
それなりに上手く世渡り出来てたつもりだし食事に小説ゲーム諸々や深い友人と呼べるものは作らなかったがそれらが身近にあった世界との突然の別れは寂しい。
だけど縁者もいない今、ある意味ではこの事態を歓迎もしている。
ここで満足に人間として生活を送れるかも分からない中で、甘い考

えは重々承知しているけど幾度も夢想した世界だ。
帰れる手段があったとしても自分はどちらを選ぶのかもう答えは出ている気がした。

異文化こみゅにけーしょん3

「残念だが君が居た世界への送還が可能なのかは私達には解らない。可能性としては魔術師か召喚術師の権威を訪ねて方法を模索すれば或いは……しかし率直に言うと私は難しいと思う」

シルディアスさんがまっすぐに俺を見つめながら言葉を更に続ける。

「今後君が何をするにせよ私達は助力は惜しまないよ、啓示にもあるがこれは縁なのだからね。当面はここで必要な事を学び世界を知る事かな」

微笑むシルディアスさんマジ男前。

若干キュンとしたのは三十路過ぎの俺でも恥ずかしくないはずだ。どちらもおっさんなのは問題だが。

とはいえ何から何まで本当に有り難い。

何か自分でもエルフさん達に恩返しが出来ればいいんだが。

「そうですね……本当に助かります。それと耳飾りはお借りしていいのですか？貴重な品にしか思えなくて」

「貴重には貴重だが今役立てなければ持っている意味がないし、いずれ不用になった際にでも返してくれればいいさ」

「ではお言葉に甘えてお借りします。ところで皆さん飲み物はいかがですか？」

目の端に部屋に置いてあった小型冷蔵庫が映ったので喉の渇きも

あり三人に聞いてみた。

「あぁ気が利かないですまなかったね。興味もあるし頂こうか」

シルディアスさんの言葉に他の二人も異論は無いようだ。

ではと冷蔵庫に近づき開けてみると電気が通っていないせいで冷気はもう薄かったが中身に変化もなくそのままだ。

というか電気が通ってない以上我が文明の機器は只の置物になるわけか。見渡すだけでもノートＰＣに携帯にデジカメなどなどと充電が切れたらハイ終了は切ない。

サンダーみたいな魔法があれば威力調整次第で何とかなるんかなぁと思いつつも、炭酸飲料やら果汁ジュースを取り出して持っていく。

「あっコップやお皿はありますか？自分の持っていた物が無いので人数分お借りしたいのですが」

「じゃあ持ってくるわ。ちょっと待っててね」

すぐにメアシリアさんが一式持ってきてくれたので改めて皆で車座に座り、床に転がっていたポテチを皿に開けまずは炭酸飲料を注いで振る舞う。

「安物で恐縮ですがお口にあえば……とりあえず乾杯ということで」

黒く染まった液体に興味を示していた三人と乾杯をしちびっと飲む。酒ではないのが残念だが飲み慣れた飲み物が飲めなくなると思うと感慨深い。ビールの残りは大切に飲もうと心に誓った。

僅かな間のあとでふと周りを見渡すと三人の様子がおかしい。

まずシルディアスさんが後ろにぶっ倒れていた。

メアシリアさんは頬を赤く染めコップを持ったままどこか虚ろな表情をしていたと思ったらおもむろに服を脱ぎだし始めた。

「ふぅ……」

「えっあのメアシリアさん？」

あっという間に緑がかった下着姿のメアシリアさん、その姿でまたコップに口をつけている。
これまたメリハリのある素敵な体ですね。
というか目がすわっていますよね？
その間エメスティアさんはというとコクコクと美味しそうに飲み一人我関せず状態だ。
つーか炭酸をあんな勢いで飲めるものなのか。
思わず凝視しちゃったよ。

「ねえ優さんこの飲み物といい食べ物も凄く美味しいです。お代わりしてもいいですか？」

名前で初めて呼ばれた事は嬉しいがエメスティアさんも明らかに変だ。
飲みながら俺にしなだれかかり、自分の名前の由来やら好きな物と笑い声を交えながら延々語り続ける。

もしかして炭酸酔いってやつなんだろか。
こんな短時間で劇的な変化は聞いた事もないし体質の違いなのかなあ。
何にせよこの状況はまたしても不味い。
右手側に半裸のメアさんがなにやらゆらゆら揺れていて左手に体をくっ付けてきているエメスさん。

もぞもぞと動いてエメスさんから一旦離れようとするも見かけによらず力強い抱擁から逃れられない。

そんな折りに入口に気配を感じ振り向くとシェイディーさんとチビッ子がポカンとした顔で立っていた。

漂う気まずい沈黙を破ったのはチビッ子だった。

「ディー！ほらっやっぱりだよ！！今度はメア姉とエメス姉までっ！あっ……もしかしたらメア姉はもう……」

おい、やっぱりとかもうってなんだ。

はたしてチビッ子が指差す方角にはメアさんが下着も脱ぎ捨てベッドの上で毛布にくるまっていた。毛布から覗いたおみ足が大変色っぽいです。

うん、今回も誤解されても仕方がないね。

異文化こみゅにけーしょん4

結局あの日炭酸酔いした三人は元に戻らずそのまま就寝の流れとなるところだがそれからが長かった。

シルディアスさんはディーさんに呼ばれた他のエルフ達に自室まで担がれて運ばれ、メアさんは誰が起こそうとしても裸で毛布にくるまったまま断固としてベッドの上から動こうとしないため皆さん諦めてそのまま放置。

しかし一番強敵だったのはエメスさんだ。やはり誰が来ても俺を離そうとせずに抱き抱え、その内にゴネ出し始めたエメスさんが段々と幼児化していく様は凄いものがあった。

その後程なく眠りに落ちたため自由になれたものの、ディーさんや他の女エルフの視線がまたこれか的なものだったことと若い男エルフ達が『凄いものを見たな……』『あぁ悪くない……』と呟いていた事を付け加えておきたい。

確かに『やっ！』『いっしょにねる』等とエメスさんが言いだしてる場面は録画物だった。

だが今望むべくは二人の記憶が完全に飛んでいることを願いたい。

で解放はされたもののディーさんを筆頭とした詰問タイムの時間。ちなみにチビッ子は最初こそ大騒ぎしていたものの、途中からポテチに興味を示していたと思ったらすぐに静かに貪り食っていました。

何とか不慮の事故ということで分かってもらえたので、メアさんは手が付けられないため臨時で客人用の部屋に連れて行かれてその日は終了となりました。

翌日になるとまだほろ酔い風情のシルディアスさんが部屋に訪れ、本来はメアさんとエメスさんを中心に俺の講師として学んでもらうはずだったが未だ本調子ではないので、復調するまで他のエルフ達

に代理で教えてもらうようにとのこと。

「はい了解です。シルディアスさんは体調の方大丈夫ですか？」

「あぁ、まだ少し高揚感は残っているが気分は悪くないよ。酒には自信があったしまさか二口三口で気を失うとは思わなかったが。しかし不思議な舌触りだったけど、あれは君の世界では良く飲まれる酒なのかい？」

「いや酒の類いではないのですが……稀に酔う人間もいると聞いた事はあるので体質的な問題かもしれません」

「ほぅ、とはいえまたご相伴に預かりたいね。こちらの酒も味わって貰いたいところだが……それと遅くなったが私はディアスで結構。こちらも優と呼んでも差し支えはないかね？」

「ええ勿論ありません、ではディアスさん改めてこれから宜しくお願いします」

手を差し出し握手を交わす。

「あぁそうだ、メアシリアが優の部屋で寝込んでしまったようだがもう戻っても大丈夫なそうだ。私は記憶にないがメアシリアとエメスティアも大変だったようだな」

恐らく細かい概要は伝わってないんだろうなー。

「いやいや楽しかったです……よ。ところでこの一帯を後で散策してもいいですか？」

「ああ構わないとも、誰か案内役を付けるので朝食後にでも観てまわるといいだろう。その食事だが我々の里では皆で集まり食べるのが主となっている、優も気兼ねなく加わってくれ。それと優の部屋だが元はシェイディの部屋でね、他の部屋へ一旦移るがまだ私物があるので折を見ては移動させるとの事だ」

「それはまた申し訳ないなあ」

「優の生活がまずは落ち着いてから部屋については本人と話すといいだろう」

そんな事を話し終えると自分の部屋までディアスさんが送ってくれました。

折角気に入ってくれたならということで例の炭酸飲料を去り際に贈呈すると酒友達で飲むとしようと非常に喜んでくれた。

気も下がっているしあのような羽目にはならないと思うけど激しく不安がよぎる。

ディアスさんもなんと言うか懲りない人だ。

一応冷やしておかないと不味くなると説明はしたけど冷暗所でもあるのだろうか？

後で聞いてみるとしよう。

で朝食には人を寄越してくれるそうなので部屋でまったりすることにする。

イメージ通りというかエルフの住まいは樹を利用したものだ。

樹自体は大樹で知られるセコイアの胴廻りを更にぶっとくして枝葉ももっさりと生えた感じで、その樹上に木造部屋みたいなものがあったり幹をくりぬいて足場やら拡張したものだったりと様々。ただ樹がバカデカイ物が多いせいで高所にある部屋同士で吊り橋的な物で結ぶ通路があるのだが移動が非常に怖い。

その際下からバレーボールが飛んできたらちょっとした風雲エルフ城になりかねない。

自分の部屋はというと大体高さ五、六メートル程度にあり幹部屋と木造加部に足場を付けたしたような集合体みたいな部屋でなかなかに広い。自分の持ち物＋αでみても余裕で結構な人数が入れる程だ。

そういやディアスさんが言っていたディーさんの私物はこの中から救出しないとなーってな事を思いつつも、まずは着替える事にして衣装箪笥からアーミーライクな無地のパンツに濃いめの赤紫色なYシャツを合わせて後は入口側にまとまって転がっていた靴から赤銅色のブーツをチョイス。

スーツはハンガーに掛けて木のでっぱりに吊るすことにした。

それから昨晩を思い返しちょっとだけ毛布の上でゴロゴロしてから部屋の整理をしていると迎えのエルフさんが呼びに来たのでいざ朝食へ。

朝食場所はというと集落の中心部にあり、案内エルフさんに依るとそこで皆でまとまって座りながら食事をするのだが、雨の日は大食堂のような家屋もあるらしくそちらはテーブルや椅子に座っての食事なそうだ。ただそちらは全員収容可能な訳ではないので順番制で利用するそうでそれ以外の者達は自室で食事となるらしい。

場所へ到着するとすでに結構な数のエルフさん達が集まっており好奇の視線をこちらに向けてくる。

この年齢にして転校生気分はかなり気恥ずかしいです。

案内エルフさんにそのまま連れられて配膳場所まで行くと列に並んで食器を持ったらメニューの前で給食エルフさんに盛ってもらうスタイル。

これは小学校の給食を思い出して懐かしい、というか三角巾はどこ

でも一緒なのね。
一式盛り終わると案内エルフさんことクリネさんに連れられて空いている空間に座る事に。
このクリネさんは良く喋る金髪がかったショートカットのエルフさんでメアさんと仲が良いみたいで今朝の出来事をあけっぴろげに話してくれた。
「昨日メアが倒れたって話を聞いて様子を見に今朝君の部屋に行ったんだけど真っ裸でしょ？朝から驚いたわよ～。それからメアが起きたと思ったら顔が青くなったり赤くなったりでね、私の事なんか上の空で急いで服を着こんでふらつきながら自分の部屋に戻って行ったのよ、あれはかなり動揺してわね。しかし潰れたディアス様もエメスもいるってのにアナタ凄い大胆ねえ」
ニヤニヤとほんとニヤニヤとしか形容が出来ない顔でクリネさんが言うと側で話を聞いていた男のエルフを始め周りのエルフも会話に参加してきた。
「俺が昨日騒ぎ見た時にはエメスとえらい親密そうにくっついてたしな。離そうにもあいつ離したくないやら駄々こねだすしスゲー光景だぜ、相当な手管持ってんなアンタ」
「あのお堅い二人がねえ……酒豪のメアが酒で潰されるのも考えられんしやっぱりそうなのか」
「けどディーを襲った前例も考えると判断し辛いわね。君いずれ刺されないように気を付けなさいよ」
「いやいや、俺の評価なんかおかしくないです？分かって言って

ますよね？……ね？」

つーかノリが軽すぎだろ、これはかなりイメージが違う。周囲のエルフのニヤつきっぷりもまた素の顔と落差がヒドイ。

更に弄られそうなところでディアスさんが現れて救出され、人数も大体揃ったのでこの里の皆に紹介の場をってことで朝食前に自己紹介と相成りました。

詳しい人数は解らないが三百～四百人程度いるのだろうか、それこそ全校集会で挨拶するみたいだ。

しかしさっきの件からして俺＝エロいの方程式が共通認識かと思うとちょっと凹んだ。

で中央部のお立ち台的な場所に立たされディアスさんから軽く紹介されパチパチと拍手を受けながら俺の番。

「えー自分は一瀬優といいます。日本の東京生まれ三十一歳独身、好きな物は色々ありますが強いて挙げればお酒です、苦手な物は昆虫かな。来て早々から迷惑かけっぱなしですがこれから宜しくお願いします」

ぺこりと頭を下げまた拍手を受けつつ一歩後ろへ下がる。

まあ長すぎてもアレだし掴みはこんなものだろう。

「これから新たな仲間として皆も優を助けてやってくれ、また今宵はささやかだが歓迎の席も設けるつもりなので宜しく頼む。ではこれで食事に戻ろう」

ディアスさんが話を締めてあっさりと終了。

クリネさん達の場所に戻ると小声でお祈りっぽいものしてるけど

いただきます的なものかな。
良く解らないのでいつも通り手を合わせていただきますと食事に取りかかる事にする。
メニューとしては酢野菜のマリネと何かの干肉が入った塩っ気風味の野菜サラダにちょっと硬めなパンと苺ジャムという実に健康的なものだ。
シンプルながらなかなかに美味しい。特にジャムは美味いなコレ。

で食事をしているとクリネさんが話しかけてきた。

「また朝から美味しそうに食べるわね～、気に入ってくれたなら良かったわ。それで優ってどんなところに住んでいたの？日本て所はここの隔絶された場所って訳じゃないよね？やっぱり違う世界から訪れたの？」

眼をキラキラさせながらクリネさん。例によって周りのエルフも興味津々だ。

「訪れたと言うか寝て起きたらここでしたよ。自分の居た世界には人間しかいないので完全にここは別世界ですね」

「うはーそれはビビるね、てか優うちらに敬語いらない。似た世代なんだしめんどいじゃん」

「んだんだ、しかしいきなりそれじゃ帰れる手段もねっーてことか」

話ながらも周りのエルフから名乗られつつ握手攻めされた。
マジでフランクだなエルフ達。

「まあ半分癖なんで極力敬語は気を付けるよ。エメスさんも帰れる手段は解らないって言ってたしなぁ、まあ何にせよここの常識から勉強していくよ」

んで食べ終わるまで食っちゃべっているとどっかで見たチビッ子が寄ってきた。

「あら？どうしたのフェリ？」

「ちょっとコレの案内をディアス様に言い付けられたのでお借りします！」

「コレって俺のことか……」

「そっかあ、じゃ優また後でね～」

で食後のまったりも無く空いた食器もそのままに連行されるようにして案内されることになりました。

「チミっ子何でそんな焦ってるんだ。ゆっくりで構わないぞ」

「チミっ子じゃないあたしはフェリだっ！それでここは試射場で隣の建物が保存室」

「ちょっと駆け足過ぎるだろうチミ」

「だからフェリだっ！んーそろそろかな……」

「えっなんだって？」

やんや言いながら歩いていると前方に本のような物を抱えた白い服装の二人組、片方はエメスさんだ。
昨日の事覚えているのかなあ、若干気まずいな。
と目があったので会釈して笑顔で近づこうとすると、一瞬固まっていたエメスさんが目を伏せ踵を返して走り去ってしまった。
一人残されたエルフさんはこちらにぺこりとするとエメスさんを追いかけていっちゃいました。
うわーそこはかとなく罪悪感が。

「あ～あ、エメス姉大丈夫かな～」

ぐぬぬっこれはチミの言う通り心配だ。
今の対応からして確実に昨日の事覚えている、初対面からしてエルフらしいとかいうか清純でピュアそうだったしなあ。

「メア姉も今日は部屋で一人食事してるみたいだしな～あんなことあったもんねえ」

ワーオ、メアさんもやはり覚えてらっしゃるのでせうか。
メアさんは最初の馬乗り的にも自分の生命の不安が。
でも様子も分からんのにお見舞い行くのもなあ……どうすりゃいいんだ。

「どーやら困っているよーだな。心の底から反省しているならあたしが仲直りをとりもってあげないこともない」

「なっ……！ほんとかチミ！」

「だからフェリだって言ってんでしょっ！……コホン、ならものは相談だけどほーしゅーとしてあんたの持ってる食べ物を要求しま

す」

「食べ物？そういやポテチ食ってたけど気に入ったのか？」

「まっまあちょっとね、だからお願い聞いてあげるかわりに……ダメ？」

「アメちゃんとかでもいいなら別にいいぞ。労働に対価は必要だしな」

「アメちゃん！何それ美味しそうっ」

安価な労働力ゲットだぜー。

仕組まれていた気がしないでもないが僕に一の子分が出来ました。

でそこから目ぼしい場所の説明を更に受けながら一旦自分の部屋へ。

今日からこの世界で一般的な共通文字の勉強も始まるそうでシェイディさんが受けもってくれるそうだ。

「いい？またディーに悪さしたら今度は許さないんだからね！また昼になったらほーこくに来るから大人しくしているよーに」

「大丈夫だって。俺を信頼しろチミ」

「出来るかバカッ！もう行ってくるっ」

すると駆け出すようにして出ていってしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1584y/

眠れる世界

2011年11月28日02時52分発行